

障害科学ゼミナール「ともに生きる」の実践報告

－真の障害を知り、共生社会を考える－

筑波大学附属駒場中・高等学校 養護教諭・化学科

早貸千代子・吉田 哲也

障害科学ゼミナール「ともに生きる」の実践報告

－真の障害を知り、共生社会を考える－

筑波大学附属駒場中・高等学校 養護教諭・化学科

早貸千代子・吉田 哲也

要約

近年の国際動向では共生社会 “誰もが相互に人格と個性を尊重しあえる社会” の実現を目指している。しかしながら、本校生徒は日常生活で障害がある人とかかわる機会があまりない。また、障害種別すべての特別支援学校を有する筑波大学の附属学校であるにもかかわらず、附属間交流はほとんどしていないのが現状である。

そこで、障害の有無にかかわらず、すべての人がともに生きる社会を考えることを目的とし、高校2年生を対象に総合的な学習の一環としてゼミナール（以下ゼミ）「障害科学・ともに生きる」を開講した。ゼミでは筑波大学附属特別支援学校の先生・卒業生による講義・疑似体験や交流を実施している。ゼミ生の様子や感想から障害の困難さに気づき、障害に対する捉え方に変化がみられた。今回はゼミの有効性と今後の課題について述べる。

キーワード：障害科学・共生社会・交流学习

1 はじめに

近年の国際動向では、2006年12月に障害者の権利に関する条約が国連総会で採択され、2008年5月に発効した。それを受けて日本では2007年5月に条約に署名をし、2014年1月に批准している。また、2014年6月には障害者差別禁止法が制定され、障害者の自立と社会参加の支援等が推進されている。内閣府でも「共生社会」「障害の有無にかかわらず、国民の誰もがお互いの人格と個性を尊重し、支えあって共生する社会」の実現を目指している¹⁾。

しかしながら、本校生徒にとっては障害のある人とかかわるきっかけが非常に少なく、障害への理解を深めたり、障害がある人の生活の困難を想像するのが難しい環境である。障害の理解や認知がない状態で、共生社会の成立は机上の空論になりかねない。

柘植によると、『障害とは、「個人」だけの要因で生じるものではなく、「個人」と「環境」との相互作用で生じるもの』であり、同じ障害があつたとしても、周りの人の理解とサポートによって困難は大きく違ってくるといわれている。その環境要因となる我々「個人」がまず障害を理解することが共生社会への第一歩であると思われる。

まずは、障害とは何かを学び、福祉の世界のさまざまな動きや問題点を知り、障害がある人とどのようにして共に生きていくのか、さらにユニバーサルデザインやインクルーシブ教育等をともに考え、障害のあるなしにかかわらず、すべての人が平等な視点を持つことができる共生社会について考えることは、本校生徒にとって意義が大きい。

共生社会の考え方は、本校の校風でもある「できる人ができることをして支えあう仲間づくり」「リーダーとフォロアーで成り立つ学校行事」にも通ずるところであり、真のリーダー（エリート）の資質の一つとして、すべての人が支えあう、共に生きるという視点は必要不可欠であろう。

そこで、筑波大学附属学校11校のうち5校が特別支援学校(視覚・聴覚・桐が丘・大塚・久里浜)という、障害種別すべてに対応した我が国最大の障害科学系教育機関という恵まれた環境を生かし、高校2年生の総合的な学習の一環で本ゼミの開講を試みた。毎回、各附属特別支援学校の教員や卒業生による講義や障害疑似体験、児童・生徒との交流を実施している。

質の高い特別支援教育を研究・実践している各附属特別支援学校の教員・卒業生・現役生から学ぶものは多く、ゼミ生は受講回数を重ねるごとに障害に対する

捉え方や障害のある人とどう共に生きるか等、ひとり一人が模索している様子が見られた。

本報告では、2011 年度のゼミの様子と、2014 年度受講した生徒の感想をもとに、ゼミの有効性と今後の課題について述べてい。

2 2011 年度 障害科学ゼミ「ともに生きる」

2.1 ゼミとは

ゼミとは総合的な学習の一環で、高校 2 年生を対象に年間 7～8 回（土曜日開催）で実施している。

5 月にゼミオリエンテーションが実施され、9～10 講座（各教科から 1～2 講座）の概要が紹介される。生徒はそこから興味関心のある講座を希望・選択する。

2.2 障害科学ゼミ「ともに生きる」とは

障害科学ゼミ「ともに生きる」は 2011 年度に初めて開講した。

このゼミの特徴は以下のとおりである。

- ・筑波大学附属特別支援学校(附属視覚・聴覚・桐が丘・大塚・久里浜)の教員・卒業生から、各障害の特徴や障害のある人と接するときの心がけやコツ等を学ぶ。
- ・特別支援学校へ訪問し、授業見学や障害がある児童・生徒たちとの交流をする。
- ・各障害疑似体験等を通して、障害のある人とのかわり方の基本を学ぶ。
- ・視聴覚教材を通して、障害や障害がある人達の文化を学ぶ。
- ・福祉の世界のさまざまな動きや問題点を知り、障害がある人との共生（ユニバーサルデザインやユキピタス、インクルーシブ等）等を考える。
- ・障害の有無に関係なく、誰もが平等な視点を持つことができる共生社会を考える。

全 7 回の内容は以下のとおりである。

05/28・オリエンテーション

06/11・第 1 回 講義①

視覚特別支援学校 雷坂浩之先生
「視覚障害の疑似体験」

06/25・第 2 回 講義②

視覚特別支援学校 雷坂浩之先生
卒業生 森敦史氏（全盲聾）「指文字の講習」

09/10・第 3 回 講義③

聴覚特別支援学校 鈴木牧子・高田史子先生

「聴覚障害の疑似体験」

「高等部生徒製作ビデオの鑑賞」

10/15・第 4 回 DVD 鑑賞

日本ろうあ協会制作の映画

「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」

11/12・第 5 回 講義④

特別支援教育センター 間々田和彦先生

「特別支援のノウハウを生かした理科実験」

11/19・第 6 回 学校訪問

大塚特別支援学校大塚祭の見学及び生徒交流

01/14・第 7 回 講義⑤

桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生

「肢体不自由教育と肢体不自由の

運動特性についての実習～車いす体験～」

2.3 ゼミ生的人数

本ゼミを希望した生徒は高校 2 年生（61 期生）164 名中 5 名であった。

2.4 ゼミ開講にむけての準備

筑波大学学校教育局では、普通附属と特別支援学校の連携委員会が年に数回開かれている。会議に出席していた本校委員である吉田（当時本校プロジェクト研究 1 の教務主任）がゼミ開講を提案した。

ゼミ開講については、障害科学に興味関心の高い養護教諭がコーディネートを行い、ゼミの構成や講師については、吉田委員とともに検討した。

講師は、普通附属と特別支援学校の連携委員会の元メンバーや本校副校長（宮崎高副校長（当時））を通して各特別支援学校の副校長の推薦者、筑波大学のプロジェクト研究などで知り合った先生方に依頼をした。

講師にはゼミの主旨・特徴を伝え、共生社会を築く上での基礎的な知識の習得及びなるべく多くの体験から、障害を実感できる内容になるよう依頼した。

2.5 ゼミ受講後の感想

ゼミ生は、各ゼミ終了後に感想を提出している。

ここでは聴覚障害ゼミ（第 3 回「聴覚障害の疑似体験・高等部生徒製作ビデオの鑑賞」及び第 4 回映画鑑賞「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」（日本ろうあ協会制作）の感想を紹介する。

2.5.1 難聴疑似体験・聴覚特別支援学校高等部製作ビデオの鑑賞の感想

鈴木先生による難聴疑似体験や高等部生徒制

作ビデオの鑑賞（大学進学を希望する生徒が、大学での学習支援についての不安を語っている）を行った。

擬似体験やビデオ鑑賞を通じて、聴こえないと一概に言っても聴こえる人もいること、読話などでコミュニケーションが十分できること等の障害の理解を深めることができた。また、生活の困難さや疎外感、焦燥感等の心的な障壁や進学・就職での不公平感といった社会的問題に気づき、自ら手話を学び友好を深めたいと思う生徒や、周囲へ障害の理解を広めようとする生徒がいた。

以下、生徒の感想を一部抜粋した。

【擬似体験での気づき】

- ・周りの音（人の声に限らず）が聞こえなくなるだけで、とても不安な気持ちになった。
- ・周囲にとけ込めない疎外感が大きかった。
- ・どういう状況で戸惑ってしまうのか、どうしてほしいのかを知ることが大切だと学んだ。

【読話体験での気づき】

- ・読話はとても骨の折れる作業であり、人とコミュニケーションをとるだけでも、聴こえる人の何倍も疲れる。聴こえる側の人間も、手話ができれば、もっとスムーズに意思交換ができるはずだから、僕も手話を学びたいと感じた。

【生徒制作ビデオでの気づき】

- ・ろう学校の生徒達が、「大学に入るのが怖い、学習支援が受けれるのか分からないからだ」と言っていた。僕自身、ろうの学生が大学に行き、手話通訳などを介して授業を受けているとは、このゼミを取るまで、一度も想像したことがなかった。皆に認知させることが、まず必要だろう。
- ・進学、職業の選択について、不公平な状況はもっと多くの人に知られるべきだと思う。

2.5.2 映画鑑賞「ゆずり葉～君もまた次のきみへ～」(日本ろうあ協会制作)の感想

「ゆずり葉」は障害者の薬剤師免許取得に制限を設けていた「欠格条項」の撤廃運動の原動力として220万人以上の署名を集め、日本初の聴覚障害で薬剤師となった早瀬氏が綴った『こころの耳～伝えたい。だからあきらめない』(著：早瀬久美、講談社)を映画化したもの。

この映画鑑賞を通して、障害を持っていても朗らかに、“一人の人間として自分らしさを求めて生き

ている姿や健常者と何ら変わることない“という気づきが見られた。また、聴こえないことで命や人生に関わる問題があることに驚きとショックを受けていた。さらに、障害が障害になることへの違和感等、障害とは何なのかを一人ひとりが考えている様子が見られた。

以下、生徒の感想を一部抜粋した。

- ・映画の中で「字幕がなく映画が楽しめない人がいるのだとはじめて知った。」という言葉があったが、同じことをゼミで障害について学ぶたびに思う。
- ・障害があることによって生まれる不便さは、背が低いから上の方の棚に手が届かない不便さ、と本質的には変わらないはず。障害が障害である、そのままの理由で、何か当たり前のことが難しくなってしまうのは、違う気がする。
- ・健常者にとって当たり前のことでも、ろう者には、命や人生がかかってくることを知ることができた。
- ・健常者からすれば、想像もできないほどの困難があるはずなのに、朗らかに生きて、日々闘っている。ろうの人と友人として話してみたい。
- ・生活で困難を感じる原因として、社会制度の不健全の裏に現代人の希薄な人間関係があると思った。

2.6 ゼミナールオープン

中学3年生(123名)及び高校入学者1年生(40名)を対象に、興味関心のあるゼミを見学・参加する機会を設けている。2011年度は1月14日(土)第7回ゼミで実施をした。この回は視覚特別支援学校の城戸先生による肢体不自由の擬似体験・車いす体験であった。本ゼミに参加した中学3年生は10名弱であり、他学年にも興味関心がある生徒の存在がわかった。少人数ではあるが本ゼミ開講のニーズはあった。

2.7 ゼミ終了後の卒業論文

2011年度の教育課程では高校3年時において卒業研究が必須であった。高校2年時のゼミでの研究テーマを継続して論文を書く生徒がほとんどである。

本ゼミ生だった5名も、障害科学に関連するテーマで卒業論文を仕上げた。テーマは以下のとおりである。

- ・「手話は言語かジェスチャーか」
- ・「ボランティア論について」
- ・「肢体不自由について」
- ・「いじめについて」
- ・「障害者支援に関するさまざまな取り組み」

以下、生徒論文から一部抜粋した。

- ・障害科学ゼミを通して、普通に学校生活を送っていたのでは出会えなかった、ものの見方や考え方に触れることができ、今後の人生に深くかわるゼミとなった。(複数)
- ・盲ろうである森敦史さんが大学進学までに至った努力は自分の想像をはるかに超えるものだろうと感じた上に、「指文字を広めて健常者と障害者のコミュニケーションの場を増やしたい」という思いもとても心に響いた。
- ・「健常者」「障害者」という区別がなくなり、お互いのできないことを助け合うようになれば一番いい。
- ・「心のバリアフリー」とは障害者が何不自由なく健常者と共に生活し、バリアフリーという言葉がなくなることだと思う。
- ・障害者には独自の文化があり、健常者とお互い尊重し合うことで「共生」という考えが生まれるのだということを学んだ。
- ・自分たち健常者だけが快適に暮らせるだけでなく、障害者の人たちも同じように暮らせる世の中にしなければいけないし、そうあるべきだとも思う。
- ・手助けは自己満足ではなく、相手のことを考えなければいけない。コミュニケーションを取って向き合うことが大切である。これからの社会に必要なのは「共に生きる」という意識ではないかと思う。

3 2014 年度 障害科学ゼミ「ともに生きる」

3.1 年間スケジュール

2014 年度は、2011 年度に引き続き、2 期目のゼミ開講である。ゼミの特徴は前回と同様である(2.2 参照)。

今回のゼミでは障害者本人の生の声を聞く機会と児童生徒との交流の機会を増やした。

また、2011 年度のゼミにはなかった知的障害・発達障害の講義を設けた。障害による困難があるものの周りに理解されにくい障害を学び、理解やかかわり方を知ることが、本校の学校生活で支えあう仲間づくりの基盤になると思われる。

全 8 回ゼミの内容は以下のとおりである。

05/10 オリエンテーション (3～4 限)

06/14 第 1 回 3～4 限 桐が丘特別支援学校
城戸宏則先生
「特別支援教育・肢体不自由教育(総論)」

06/28 第 2 回 1～4 限

元桐が丘特別支援学校 A 君

ご家族(A 君兄 本校卒業生)

「障害のある本人及びご家庭からのお話」

桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生

「肢体不自由の運動特性の実習～車いす体験～」

09/20 第 3 回 1～2 限 聴覚特別支援学校卒業生
柳匡裕氏(ありがたいの種及び Social Cafe Sign
with Me オーナー)・日本手話通訳 2 名

「ろう者が望む社会」

10/01 第 4 回 学校訪問 聴覚特別支援学校
鈴木牧子先生

「難聴疑似体験」「高等部生徒と交流」

11/15 第 5 回 2～4 限

筑波大学特別支援教育研究センター 宮崎善郎
先生 「視覚障害について」「弱視疑似体験」

12/17 第 6 回 学校訪問 大塚特別支援学校
安達敬子先生 小学部児童と交流

「科学実験を一緒に楽しむ」

01/10 第 7 回 2～4 限 視覚特別支援学校
間々田和彦先生

「特別支援のノウハウを生かした理科実験」

01/24 第 8 回 3～4 限 大塚特別支援学校
安部博志先生 「発達障害について」

3.2 ゼミオリエンテーション

高校 2 年生(64 期生 165 名)を対象に 10 講座の概要の説明があった。

本ゼミでは 2011 年度のゼミの様子(写真)や感想を多く盛り込んだ。また、本校卒業生(62 期卒)の弟である A 君(高校 1 年生、肢体不自由、知的障害)、及びご家族の講話・交流があること、そして、ご家族からのメッセージなどの紹介をした。

お母様からのメッセージ

「皆さんの周りには、障害を持っている人はいますか？車いすの方はいますか？街の構造やロボットスーツ、共に生きていくことも含めて、10 年後・20 年後・50 年後に暮らしやすい社会について、皆さんと一緒に考えてみたいなあと思っています」

その他、本校卒業生佐橋一旗氏(57 期)の Mobile sign(聴覚障害者に手話専用端末を提供し、遠隔手話通訳や常時配信型手話ニュース等を提供するサービス)の開発「GlobalTic Talentpreneur Award 2009(国際ビジネスコンテスト)」で 2 冠等を紹介し、直

接的な支援だけでなく、自分たちの知的財産や技術が共生社会を築くことができる等の内容も含めた。

最後に、障害は決して他人ごとではない、もしかしたら自分や自分の身の周りで障害は起こりうるもの、障害を知ることから始めよう、一緒に体験し、学ぼうという語りかけをした。

3.3 志望者数

受け入れ人数は 10 名程度のところ、第一志望者 22 名、第二志望者 15 名であった。講師陣に志望人数及び志望理由を伝えたところ、障害を学ぶ姿勢に賛同が得られ、第一志望者の 22 名全員をゼミ生とした。

3.4 ゼミ生志望理由

本ゼミを志望した生徒 22 名のうち、今まで障害者とののかかわりがあった生徒は 7 名（うち 2 名は近親者に障害者あり）であった。また、かかわりのなかった 15 名のうち、現在、自分自身が障害に対して背を向けている、距離がある等「障害と向き合っていない」と感じている生徒が 3 名であった。

自由記述で志望理由をおおまかにわけてみると、①白杖や盲目の方への接し方や近親者とののかかわり方を学びたい等の「障害のある人とののかかわり方を知りたい」、②今まで気づけなかったことを見つけ、物事の多面的な理解を深めるようになりたい、ゼミを受講しなければ自主的に障害を考えるきっかけがないと思う等の「視野を広げたい」、③教育・医療・福祉・法曹等の分野に生かしたい等の「将来に役立てたい」、④障害者の居心地の良い環境を考えたい等の「障害者の住みやすい社会を考えたい」、⑤障害者本人の話が聞ける、通常の授業では扱わない分野だから等の「貴重な体験ができそうだから」の 5 つに分類できた。

表 1 志望理由

志望理由	人数
「視野を広げたい」	7 名
「障害者とののかかわりを知りたい」	6 名
「貴重な体験ができそうだから」	4 名
「将来に役に立てたい」	4 名
「障害者が住みやすい社会を考えたい」	2 名

以下、志望理由を一部抜粋した。

- ・周囲に障害者が全くいないが、小学時の自由研究でバリアフリーを調べていた。将来福祉に貢献したい。

- ・通常の授業では扱わない分野であり、また筑駒というバックグラウンドを生かした内容だと思ったから。
- ・障害を抱えた人たちに対して、自分たちに何ができるのかを知りたい。
- ・障害のある方について何も知らない、ということが、この講座を受講する最大の理由。
- ・このような機会でないと、障害がある方について自主的に知ろうとは思わないと考えた。今までほとんどかわりのなかった世界を知り、視野を広げたい。

3.4 講座紹介

3.4.1 第 1 回（2 時間）

桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生

「特別支援教育・肢体不自由教育について（総論）」

城戸先生から「障害者の権利条約による合理的配慮と基礎的環境の整備」「肢体不自由の運動・動作の不自由さ」「ロボット「HAL」を用いた多様な動きの解明の現状」「生活の特徴と配慮」「障害者の保護者の心境（誰も助けてくれない、疲れ）」等の講話があった。

講話を通してゼミ生は、我々が何気なく無意識でしている動作であっても、肢体不自由の人は意識的に行っていること、おおかたの動作はできるが一度に一つの動作しかできないので時間がかかること、自分がやりたいことの時間を確保するための介助であること、等の障害理解を深めていた。



また、バランス感覚体験では、バランスクッションを用いて、車椅子生活での「重心の高さ」「バランスの悪さ」等の身体的負担の感覚を体験することで、生活での困難さに気づくことができた。

その他、障害があることで「情報が多くなると、情報の一部が欠落することがある」「全体がつかみにくく、部分視しかできない」等の認知の問題や通常級・特別支援学級・特別支援学校の現状と課題等の話から多くの気づきと学びがあった。

以下、ゼミ生の感想を一部抜粋した。

- ・「ただ足が使えないだけ」でないことにとっても驚いた。「重心が上がってしまう」ことを知れてよかった。
- ・何もできないから介助しなくてはならないわけではなく、自分のやりたいことをする時間を確保するために介助が必要となる。介助の印象が変わった。
- ・障害があることで自分たちには思いつかないような大変さがあることを知った。
- ・同じように見えても、見方や聞こえ方が違うことを知らなければならぬと思った。
- ・情報を整理して、しっかり説明する必要がある。時間も考慮しなければならない。

3.4.2 第2回(4時間) 2部作

3.4.2.1 第一部

元桐が丘特別支援学校 A君(高1)

ご家族(A君兄は本校卒業生)

「障害のある本人及びご家庭からのお話」

A君(元桐が丘特別支援学校に在籍、肢体不自由、知的障害)とA君家族をお招きし、それぞれの立場から話を伺った。必要に応じて、城戸先生から障害理解が深まるような専門的な説明があった。

また、当日はA君が桐が丘特別支援学校に在学中の担任である石田周子先生の参加があった。石田先生からは、障害による「文字や図形の捉えにくさ」「量の概念や感覚の難しさ」等の説明があり、それらを補うためのトレーニングや生活訓練等の教育実践を学んだ。

家族やA君からの話の内容は次のとおりである。

【母親】

A君の生育、出生後の障害認知、学校選び、着ぐるみや大きな音が苦手であること、日常の困難(蚊を退治できない等)、車椅子での移動の困難さ、理解や配慮・思いやりのない人に怒りを感じた経験(スーパーや電車内での出来事やじろじろ見られる、かわいそうと言われる)、ロボット「HAL」の体験談と可能性、災害時の対応、車椅子購入における経済的負担、本人への障害告知(中3)から現在に至るまでの話があった。

【父親】

A君の大好きな野球を通して、全国の野球場の障害者席の現状や学習支援となる文房具の工夫(取っ手をつける、コントラストをつける)、普通学校の通学路の現状等について話があった。

また、二つの問いがあった。

「あらゆる人を満足させる道路構造はあるか？」

「あるなら何故そうなっていないのか？」

【A君兄】

弟・A君との歩みを過去・現在・未来と区切って話があった。兄弟喧嘩はまったくなく、弟の記憶力が優れていて羨ましい、移動で鍛えた腕の筋肉がすごい等の話があった。また、未来に向けて「自分でできることを増やすかかわり」をしていることを語ってくれた。

【A君】

A君兄の進行のもと、ゼミ生から質問をうける形で、A君の話とした。

ゼミ生はA君のことを通して、「障害があっても夢を持っている」「自分でやれることはしたいと思っている」「ちょっとした工夫や配慮で生活しやすくなる」「介助は本人の気持ちに寄り添うことが一番」等、障害に対する理解を深めることができた。また、道路や障害者席等の施設・整備の問題等、今まで気に留めることがなかった視点を学ぶことができ、より身近な社会問題として捉えるようになっていた。なかにはデザインを自ら提案するゼミ生もいた。本人及び家族それぞれの立場から、様々な視点で語られた本講座は障害科学を理解する上で意義深いものとなった。

以下、生徒の感想を一部抜粋した。

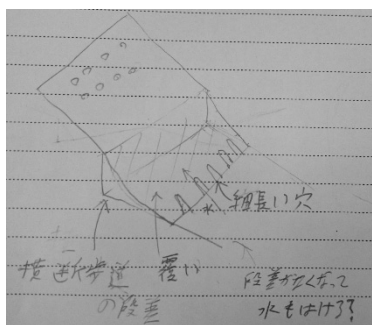
【母親の話に対して】

- ・バリアフリーの考え・思いやりの心はまだ広がっていないことが悲しかった。(複数)
- ・車椅子が16歳で4台目ということに驚いた。
- ・先天性の障害は、後天的なものに比べて大変なのは知らなかった。

【父親の話に対して】

- ・野球場に「行ける」ようになったが、まだ十分に「楽しめない」状況と知り、更なる配慮が必要と感じた。
- ・学校が整備されていても学校までの道が悪い、というのは考えたことがなかった。社会的にも難しい問題を解決する必要があると思った。(複数)
- ・文字の立体性を意識したことがなかったが、認知の仕方が違うと、こんな見え方をするのかと、驚いた。

- ・文房具など大変なことが多々あると再認識した。
- ・工夫次第で、バリアフリー化できるのは面白い。自分にも何かできることがあれば、積極的にアイデアを出していきたい。(多数)
- ・必要は発明の母と言うように、何かバリアフリーのものを作るには、何が問題なのか知ることが大事だと思った。



(道の構造をデザインして提出↑)

- ・高い機能や質をサービス(インフラ、ファシリティ)に求めるとコストが大きくなるので、技術の開発だけでなく、そのコストダウンも重要だと感じた。

【A 君兄の話に対して】

- ・兄弟喧嘩が一切ないのは驚いた。
- ・「自立させる」ように働きかけるとするのはとても勉強になる。

【A 君の話に対して】

- ・A 君の将来の夢が野球選手だったということ。「私たちが宇宙飛行士を夢見てあきらめるのと同じだ」ということを聞いて、なるほどと納得した。
- ・A 君が中 3 の時、障害のことを聞いても「あまり驚かなかった」というのが、驚いた。(複数)
- ・「ぼやいたことがない」「かわいそうと言われても…」と、本人は本当に気にしていないんだなと思った。
- ・できることを増やすために自力で頑張るのか、本人の自由な時間を確保するためになるべく介助するかという選択の難しさを感じた。本人の希望に寄り添うことが大切だと知り、心に止めたい。(複数)
- ・「手伝ってもらいたくない気持ち」と「手伝ってほしい気持ち」の対立は A 君も難しい間いだと言っていて、とても印象深かった。(複数)
- ・「助けてもらうのは嫌い」と思っているとは思わなかった。普通の人と同じ考えをしているのだと思った。

【全体を通して】

- ・家族から愛情を受けているのがはっきり伝わってきてよかった。
- ・身近な生活における負担というものが多岐にわたることがよくわかった。
- ・自分には知識がなくて考えるのは難しいと痛感した。
- ・よく「強い心を持っている」とか言われるが、そういうわけではないんだと思った。それを考えると、

僕って何も知らなかったんだなって思った。

- ・障害者の視線をもっと理解する必要がある。
- ・「ある人にとって必要なものが、他のある人にとって邪魔なものであったりする」は全てのことに言えること。この講演で得られた一つの考え、成果である。
- ・全ての人が満足できるような設計を考えるのは、本当に難しい。

A 君からゼミ生へ届いたメッセージが届いた。

「ゼミ生の感想を読んで」

自分の障害について、何とも思わなかったのは本当のこと。皆の感想の書き方が、お父さん・お母さん・お兄ちゃんの話に分けて書いていたり、ジャンル別に書いていたり、図式化していてすごいと思った。何人かは“A 君”と名前を書いてくれていたのがうれしかった。車椅子実習でみんなが圧迫感・焦燥感等を感じて、わかろうとしてくれてよかった。僕は全国民に障害者のことを理解してと思わないが、関心を持ってくれる人が少しずつ理解してくれようとしているのはうれしい。

今回は皆に会えたこと・家族で僕について考えて話し合えたことの二つがよかった。

特にお兄ちゃんは普段あまりしゃべらないし、かわいがってくれているのはわかっていたけど、僕が気をつけるところ・いいところや過去現在未来にわたり考えてくれていると知って驚いた。

3.4. 2.2

第二部 桐が丘特別支援学校 城戸宏則先生

「肢体不自由の運動特性の実習～車いす体験～」

1・2 時間目の話を受けて、実際に車椅子を使用した体験をした。また、建築基準法と建築の現状、バリアフリー、車椅子更新時の補助金の現状等の話や「合理的配慮とは一体何なんだろう？」との問いを投げかけられた。

車椅子体験では、数種類の車椅子に乗り、乗り心地の違いを感じたり、車椅子に座っている人をじっとみる、集団で迫る等の状況を体験した。

これらを通して、車椅子生活の圧迫感・恐怖感や困難を感じることができた。さらに、ゼミ生は自ら電車の中や人混みが多い場所等を想定し、より具体的な日常生活での体験を試みながら、障害を理解しようとしている様子が見られた。そして、普段気にかけなかったことや社会問題に意識を持ち、今後の社会の在り方を模索している様子が伺われた。

以下、ゼミ生の感想を一部抜粋した。

【建築基準法とバリアフリーについて】

- ・国が決めた建築基準法で定められている車いす用の廊下幅は90 cm（実質80 cm）で実際試してみるととても狭いし入れないこともあった。意識したことがなかったので、家に帰ったら見てみようと思う。
- ・段差とか幅とかの空間把握もまったく違って、バリアフリーの重要性を再確認できた。
- ・「バリアフリーは経済と相反している」これは永遠のテーマだと思った。
- ・現在のバリアフリーはそこまでバリアフリーではないことが分かった。ただバリアフリーを増やせばいいという問題ではない。（多数）
- ・バリアフリーで定められていても、バリアは必ず残るので、人の手が必要になる。「究極のバリアフリー」は存在しないというのも、考えさせられた。（多数）

【車椅子の更新と経済的な負担について】

- ・電動車椅子を購入するには75～300万がかかるのに驚いた。補助金の問題を感じた。（複数）
- ・3～5年で乗り換えるものとしては値段が高い。
- ・車椅子更新が補助金だけでは足りないのは大量生産ができないから。では、海外に輸出先はないのか？
- ・福祉に使われる税金の中で、高齢化社会と障害分野にどのように分配するかの問題について、消費税を上げる動きも出ている中で、タイムリーな話題であり、いい使い道を考えていきたいと思った。

【車椅子生活での威圧感・圧迫感】

- ・周りに立たれている圧迫感・威圧感・焦燥感や車椅子操作の難しさなど、様々な発見があった。（多数）
- ・歩いている人の速さがとても速く感じ、怖かった。
- ・無意識のうちに威圧感を与えてしまっていると思うと申し訳ない。その人のことを考えて行動したい。

【障害の理解】

- ・頑丈な車椅子とコンパクトな車椅子、どちらを選ぶかについて、答えは「デザインの良い方を選ぶ」だったことに一番驚いた。（多数）
- ・自分が無意識に障害者は自分たちと違う境遇を生き延びて、考え方がまったく違うと考えていたことに気付いた。
- ・肢体不自由の人は“聞いていない”と言われるが他の動きで、精一杯だからだとわかった。（複数）
- ・「全体の認知」ができないわけではなく、言い方を工夫すればしっかりできるということを知った。

【配慮について】

- ・車椅子に乗っている人の視点からものを考えないと我々には想像が難しいことが多いと思った。
- ・バランス感覚が我々と全然違うということをしっかり頭に入れて接しないといけないと思った。
- ・各障害に対する対処法が異なる部分もあり難しいと感じたが、勉強して障害者の助けになりたい。（複数）

3.4.3 第3回（2時間）

聴覚特別支援学校

（当時の校名は「筑波大学附属聾学校」）卒業生
ありがとうの種代表 兼 -Social Cafe - Sign with Me オーナー 柳 匡裕氏 「ろう者が望む社会」

柳氏は聴覚特別支援学校（当時は聾学校）の卒業生で、本ゼミ講師である鈴木先生の紹介で講師の依頼をした。

柳氏はグラフィックデザイナーや車両研究開発、障害者就労支援業を経て、障害者の就労に対する厳しい現実を体感し、障害者が「ありがとう」といわれ、自尊心を持てる社会の実現をめざし、起業して「店内は日本手話が公用語」をキャッチフレーズに、手話カフェを開業している⁵⁾。また、学生の学習支援のコーディネートや多数の講演で、社会貢献を実践している。

当初、カフェでゼミ開講を想定していたが、22名入ることができず、本校で実施することになった。

柳氏の講演には手話通訳を2名付けた。手話通訳を長時間すると腱鞘炎やうつ状態になることもあるので、15分交代を原則とした。



内容は、「マイノリティとマジョリティ」「社会の中で障害を被っているゆえの障害者」「障害者の語源」「障害者の就労問題」「コミュニケーションの課題」「問題解決にはPDCA サイクル、問題共有の重要性」「障害者の福祉漬けの現状・手のひらの自立」「ろう者の望む社会（動画の紹介）」「Sign with Me について」「当事者としてのミッション」等、多岐にわたった。

柳氏の講演でゼミ生は、「ろうを障害とっていない、社会から害を被っているから障害者だということを受け入れている」という柳氏の考え方に驚き、障害の捉え方を見直すきっかけとなっていた。また、障害者の成り立ち、コミュニケーションの困難から就労や昇進が難しい現状、「してあげる」「してもらう」という依存関係でしか自立できない福祉制度等、多くの問題提起に対して、ゼミ生は当事者の視点に立つことや問題を共有し、聴者とうろ者が対等な立場で考えていくこと等、これから共生社会を築く上での重要な考え方を学ぶことができた。

講演終了後、以下の動画の紹介があった。

「あなたならどうする？スーパーの障害者差別」

「Make the World Accessible」

「Bob's House Pepsi's new Super Bowl」

以下、ゼミ生の感想を一部抜粋した。

【ろう者について】

- ・柳さんは「ろう者」であることに誇りを持っていて、私たちが「かわいそう」と見えてしまうこの見方を是正してくれるような内容だった。
- ・「ろうであることを障害と思ったことは一度もない。だけど『害』を被っている人であるという意味で障害者であることを受け入れている」という言葉が印象的であった。(多数)
- ・どの障害の種類の人でも自身を障害者に思ったことはない、と言っているのにはとても考えさせられる。
- ・ろう者は耳が聞こえるようになるより、手話社会が広がる方を望むことも多いと知れて良かった。
- ・聴者のつくった社会の中で、マイノリティのろう者として生きている。マジョリティがマイノリティを制限しているという事実を学んだ。(多数)

【障害者の語源】

- ・産業革命の時代に大量生産のための規格化が進み、型に合わない存在への社会的な同調圧力が強まっていくことにつながり、障害者という言葉が生まれたという話が興味深かった。(多数)

【ろう者の就職状況】

- ・障害の中でも聴覚障害が最も社会的に困難（賃金の低さや昇進率の低さ等）な状況にあるということを知った。(多数)

【パンとサーカス・福祉漬け・手のひらの自立】

- ・聴者の視点からの「福祉」に疑問を感じた。
- ・“もらう”“あげる”の関係だと何の発展もない。
- ・「ゆでがえるの法則」では、自分に起こっている問題

に気づかなくなる怖さを「手のひらの自立」の場面で学び、自分の抱える問題は自分で解決できるよう身につけたいと思った。(多数)

【Sign with Meについて】

- ・雇用の創出、職域開発、ロールモデルの提供としてのカフェであることを知った。
- ・「Sign with Me」というカフェ、ロゴも考え抜かれているし、独特な雰囲気をつけていてよいなと思った（機会があれば行きたい）。

【手話について】

- ・後半は通訳の解説を聞かずに手話だけで3割くらいはわかりそうだったので、手話は直感的で理解しやすい（覚えやすい）言語かもしれないと思った。
- ・ひとつの伝達手段として手話はとても効率的かもしれない。口言葉より時間当たり効率は高いし、遠くの人と双眼鏡越しの会話もできる。

【共生について】

- ・聴覚・言語障害の方はコミュニケーションの方法が違うために職場での人間関係や昇進・所得において、より苦労するという話を通して「問題を共有することの大切さ」を学ぶことができた。(多数)
- ・同調圧力が強い社会は、健聴者側の意識を変えていかなければならないものだと感じた。
- ・「ろう者」を助けてあげるのではなく、「ろう者」を尊重し、歩み寄らなければならないと感じた。(複数)
- ・ユニバーサルデザインが生まれたのは、色覚に異常を持っていて、日常生活で何度も困った経験のある人たちが、それを世間に伝えて解決策を探ろうと自ら動き出したからだと思う。僕も、解決に導くための実行力や知識を今のうちから身につけておきたい。

【共生への問い】

- ・聴覚障害であれば、聴者が手話を習得することで、『聴覚障害者の望む社会』のビデオのような世界ができていくかもしれないが、視覚、内部、肢体障害に対してはどのようにしていけばいいのだろう。“もらう”“あげる”の関係によりなりがちだと思う。

3.4.4 第4回学校訪問（1日）

3.4.4.1 第一部 聴覚特別支援学校

高等部 鈴木牧子先生「難聴疑似体験」

鈴木先生の講義では、最初、聴覚障害への思い込みや誤解、「情報を正しくかつ十分に得ることができないことによって生まれる『社会的バリア』」の話があった。

また、読話は口形だけではなく、表情や自分の持っている知識、話の内容の前提となる情報等を活用しな

がら、話の内容を類推しており、聴覚に障害がある人は非常に大きなエネルギー（集中力）をもって、コミュニケーションしていることを学んだ。

それらをふまえて、情報の獲得やスムーズなコミュニケーションのために必要な「手がかり・情報の活用」を学んだり、お互いの顔（主に口元）がよく見えるように話す、普通の速さで心持ち大きめの声で話すという等のアドバイスがあった。

擬似体験では「聞こえにくいために自分の置かれている状況が分からず不安であること」「その場で話題になっていること・行動すべきこと等の情報が得られず、一人だけ取り残された気持ちになること」「周りの状況を判断したり、キーワードを読み取ったりして、話の内容を推測するが、本当に正しいかどうか不安が尽きないこと」「周りの人に聞きたくても、実際はなかなか聞くことができないこと」を体感できるプログラムを行った。

ゼミ生は難聴体験を通して、孤独感や不安感、そして読話による集中力や疲労感、人に聞きたくても聞いたときの相手の反応をみてコミュニケーションをあきらめてしまう心境などを実体験することができた。



以下、ゼミ生の感想を一部抜粋した。

【難聴体験を通して】

- ・わからないことを聞いたら、相手もどうしたらいいか分からず、困ってしまったので難しいと思った。
- ・聞こえないことがもどかしくなり、ヘッドホンを外したくなった。
- ・先生が怒ってきたときは、本当に恐ろしかった。耳が聞こえない人には怒らないほうがよいと思った。
- ・何を言っているのか何がしたいのかわからず、孤独で取り残された気分になった。困り果てた。（複数）
- ・自分が足を引っ張っているということばかり考えていた。耳が聞こえない人が社会に出ると、こういう

気持ちを常に持つことになると思った。（複数）

- ・視覚的な情報（顔や動きや雰囲気）で理解しようとしたが、難しかった。（複数）
- ・表情や話の文脈にとっても集中する必要がある。（複数）
- ・手を叩いたりして、かなりうるさくしてしまった。実際、聴覚障害者の人は、無意識に周囲に嫌悪感を持たれることがあるのかなと思った。

【伝え方の難しさ（自分→難聴体験者）】

- ・話し方（口の動かし方）を上手にすることで、ある程度の“理解”ができるが、話し方によっては全く理解できないということの「差」の大きさに驚いた。
- ・何を言いたいのか、何をやりたいかを伝えるのはとても難しかった。伝わらないとこちらが焦って、よくわからなくなってしまうし、大変だった。（複数）
- ・普段どれだけ言葉に頼っているのかを改めて感じた。（複数）
- ・自分はゴニョゴニョとしゃべる癖があることを自覚していたので、はっきり口を動かすことを心がけた。
- ・人によって理解する速さが全然違うなどと思った。
- ・コミュニケーションツールとして、筆談は大事だと改めて実感した。（複数）
- ・ジェスチャーの有用性を改めて知った。聴覚障害の方の助けの時に積極的に生かしていきたい。（複数）
- ・一音ずつ区切って言うより、文節ごとに区切った方がわかりやすいということを初めて知った。

【全体を通して】

- ・僕たちが“ああ大丈夫かな？”と思ってしまう一方で、相手がその裏で大変な労力をかけているギャップが様々な障害の問題を難しくしていると思った。
- ・聴覚障害者への配慮について完全に間違ったことを信じていたんだなと体験を通して実感した。
- ・「聴覚障害の人たちは聴覚で劣るけど、視覚に勝る」「僕は聴覚に勝るけど、視覚で劣る」というように、大きい目で見れば違いがないのだと思った。

【学校のシステム・環境について】

- ・黒板の前にあるスイッチを押して注目を集めるというものは、なかなか考え付かない。
- ・床の下にも聞きやすくする設備があり、机の形も全員が一樣に先生を見れるように工夫してあった。
- ・考え抜かれたシステムに驚き、彼らの生活をより楽にしているのだと感じた。
- ・先生方の教える内容も手話を考え、わかりやすく丁寧に話していて素晴らしかった。
- ・モニターなども活用していて、“見てわかりやすい”ことにもこだわっていた。



3.4. 4.2

聴覚特別支援学校 高等部 1・2 年生徒との交流会

交流はランチタイムから始まった。ゼミ生が高等部 1 年・2 年のクラスに入って、一緒に昼食をとった。

その後、高等部 1 年と 2 年に分かれ（ゼミ生各 11 名ずつ）、それぞれ交流体験を実施した。

高等部 1 年はゲームでアイスブレイクをした後、聴覚障害者に対するイメージや共に生きるにはどうしたらよいか、等をフリートークした。

高等部 2 年はパワーポイントによる聴覚障害についての説明の後、各クラスにて手話で自己紹介、聴覚障害クイズ、お互いの質問、カードゲーム等。生徒による自主的なコーディネートで交流を行った。

交流では最初、表情に硬さがみられたものの、手話でお互いの自己紹介をしたり、人工内耳の生徒が手話通訳しながら会話を楽しんだり、筆談を用いてコミュニケーションをとったり、しだいに和やかな雰囲気になっていった。最後の頃は肩を組んで歩き、談笑する姿があり、また交流をしたいと希望が多数あった。

交流後、高等部の生徒からアンケートの依頼があった。内容は、「いままでの聴覚障害者とのかかわりの有無」「高等部生徒の印象」「交流前後の聴覚障害への考え方の違い」「共生に向けての心がけ」であった。

アンケートでは、ゼミ生全員が交流前後で「障害に対する印象が変わった」と回答し、交流を通して「自分たちと何ら変わりのない高校生だった」「聴覚に障害があるけれどもその程度は人それぞれであり、十分にコミュニケーションができた」「聞こえるようになることを望んでいるのではなく、聞こえなくても幸せに生きることを望んでいた」等、多くの気づきがあった。また、このような交流の機会を増やして障害への正しい知識をもち、積極的にかかわることにより「共生」について良い案が出ると思う、との意見が多かった。

以下、ゼミ生の回答を一部抜粋した。

【交流前後で障害に対する考え方の違い】

- ・確かに聴覚に障害があるが、そのほかは僕らと全く同じの高校生、ということを知った。（多数）
- ・全然、人とコミュニケーションをとらないものだと思っていたが、彼らは彼ら同士でコミュニティを作っていて（そのの是否はともかく）、別の言語でしゃべっている人たちのように感じた。
- ・手話だけでなく、話したり聞いたりして会話をする人が聴覚障害者の中に多くいると分かり、驚いた。
- ・抽象的だった聴覚障害者という「概念」が具体的なイメージに変わった。
- ・意思疎通が難しいのかと思っていたが、筆談などを加えると気軽に会話できるのだと分かった。（複数）
- ・聴覚障害者を助けてあげることは、上から目線のようで、相手も嫌がると思っていたが、そうではないと教えてくれた。どんどん助けたいと思う。
- ・まだまだ聴覚障害者に対する世間の配慮が足りないと痛感した。



【共生に向けて何をころがけたらよいか】

- ・今回のような交流する機会がたくさんあれば、お互いが理解できるようになり、より「共生」について良い案が出ると思う。（複数）
- ・どこまで踏み込んで聞いていいのかという距離感をわかっていない。この距離感をつかむには積極的なコミュニケーションが必要だと思う。
- ・聴覚障害者を障害者としてみるよりも、手話という他言語でコミュニケーションをとる人としてみると、健聴者が手話を覚える気になるとともに、聴覚障害者自身が感じている疎外感もなくなると思う。
- ・特別支援学校に健聴者が混ざれるといいと思う。（現状だと社会との乖離がますます進むだけだと思う。）

- ・言葉よりも心で通じることが大事。言葉以外の表現力を上げることが重要と感じた。これはグローバル化の中でも重要な能力だと思う。
- ・相手を理解すること。(僕も含め) みんな間違った認識をしていて、誤解を生むこともあるから。
- ・会話に対して、あまり不安にならず、気軽に積極的に意見を伝え合うことを心がけるといい。(複数)
- ・健聴者が聴覚障害者の正しい知識を持つべきだと思う。正しい知識があれば、双方不快な思いをすることなく、普通に接することができると思う。

3.4.5 第5回(3時間)

筑波大学特別支援教育センター兼視覚特別支援学校 宮崎善郎先生

「視覚障害について」「弱視疑似体験」

宮崎先生の講義では、視覚障害の講義や弱視疑似体験を通して、障害による不自由さ等を学んだ。

前半は「視覚障害の概論」「マリオット盲点や見えない状態での線や図形(点字)を理解する体験」「白杖の現状、盲導犬や点字ブロックについて」「見えにくさと見えるようにするための配慮(見たいもの以外のノイズを除く、ピクトグラムやアンダーライン・囲みで強調等)」「視覚障害者の誘導の仕方」等の話があった。

後半は、弱視疑似体験教具を用いた日常生活体験を行った。プリントを読む、ペットボトルのお茶を注ぐ・飲む、オセロをする、絵を描いて切り抜く等の体験をした。その他、ゼミ生自ら、教室内を移動しながら見えにくさを体感したり、相撲をしたり、スマホの画面操作の不自由さを実感していた。

さらに、今回のゼミでは、多くの質問が出たことが特徴的であった。視覚障害という身近でイメージしやすい障害であることも背景にあると思われる。

以下、生徒の感想を一部抜粋した。

【弱視(すりガラス)体験での気づき】

- ・ある程度はできるが時間がかかるのは、他の障害を持つ人とも同じだと思った。(複数)
- ・視力低下よりも、視界が白濁のほうがはるかに不便な気がする。
- ・目が悪いだけなら、物を目に近付けたりすることで何とかすることができた。しかし、視界が曇っていたり、まったく見えなかったりすると作業するのはサポートなしでは、とても難しかった。
- ・全体を見渡すこと、日常生活を送ることの難しさ、大変さもよくわかった。

- ・小さいものだけでなく、大きすぎるもの(建物とか道とか椅子とか)も、とてもわかりにくい。
- ・「動いているもの」と「前後のもの」が見えない。
- ・いつもよりやや作業の速さが遅くなり、目も疲れたので、困難さがわかった。
- ・遠くの人やものからの情報が入ってこないのはとても不安に思った。
- ・遠近感是完全に失われ、後ろから人に押されたときは恐怖だった。
- ・知らない場所は一步踏み出すだけでも相当な注意をはらわなければならず、恐怖を感じ疲れた。(複数)
- ・電車の乗降等、混雑する場面では怖いと思う。
- ・行動範囲が狭くなりがちになるような気がした。
- ・動作が大変というのと同時に周囲に気を配る必要で精神的な疲労も大きいのだと感じた。
- ・触覚と物体の存在感を頼りにするしかないが、走るとはもちろん、歩くことすらままならず、茶を入れるといった基本的なことでも不安を感じつつ、やらなければならないというのは、視覚で行動している我々からすると大変困難であると思った。
- ・スマホを操作すると、画面が明るく、色で識別することができたので、ロックを解除して、特定のアプリを起動することができた。色の大切さを実感した。文字は読めなかった。
- ・白色の服、色の薄い服を着ている人の認識は、それすら難しく感じられた。

【全盲体験・両目を黒の板で隠した状態での気づき】

- ・後ろから背中を押されるのは怖かった。その状態では障害物が何もないとわかっていても走ることではできなかった。(複数)
- ・足元の状態が分からず、人の助けなしには歩けないと思った。(複数)
- ・全盲の人々は、空間の把握ができない、時間がかかることに困っているだけでなく、常に恐怖を感じているのだと思う。(複数)

【点字の線や図形を触る体験での気づき】

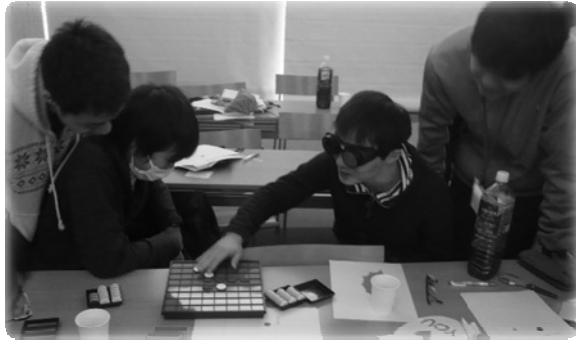
- ・触覚での判断の難しさを実感した。自分の触覚が鈍化されることを学んだ。触り続けていると、最初よりは形状や傾きなどが分かった。(複数)
- ・前もって形の予測が立てられるということは、認識をするうえで大事なことだと感じた。
- ・点字を用いる人は相当苦労しているのだと思った。

【オセロ体験での気づき】

- ・オセロの盤面を触覚だけで把握するのはとても難しかった。意識の大部分を白黒の判別に費やさざるを

得ないのだなと思った。とても頭に負担がかかった。

- ・見ていてイライラしてしまった。プレイが遅くなるのは当然のことなのに「早くしろ」とか言いたくなるのは、理解・気遣い・思いやり不足だと実感した。



【コップにお茶を注ぐ体験での気づき】

- ・水面の把握がうまくできずにこぼしかけて焦った。
- ・コップに飲み物を注ぐのは声の指示だけだと難しい。
- ・「～に障害物がある」といった定性的なことは声でも伝えやすいが、「コップが少し傾いている」といった定量的なものは言葉で伝えづらい。
- ・ペットボトルからお茶を注ぐ体験は教育でカバーできるかもしれないが、日常生活では、習ったことのないシチュエーションに出くわす方が多いと思うので本当に大変だと思う。

【白杖の問題や誘導体験での気づき】

- ・白杖での事故を初めて知り、視覚障害者の方はかなり注意しながら歩いているのだと思った。
- ・誘導するには肘をつかませるとよいのだと知り、とても勉強になった。実践したいと思う。

【視覚障害についての気づき】

- ・教科書のように誰でも判別しやすいデザインを普及させることが必要だと改めて思った。
- ・視覚障害といっても形態や重度はさまざまであることが分かった。
- ・マリオット盲点の実験では、自分の良好な視野は中心部のみであり、僕に限られた小さい視野しか持っていないことが分かった。

【障害への気づき】

- ・さまざまなバリアとその不便さを感じた
- ・視覚が重要な感覚であるということ、触覚があまり頼りにならないこと、弱視といえど生活にいろいろと支障が出ること(特に視野の狭さに不便を感じた)は少し意外だった。
- ・僕自身、軽度の色弱で、例えば肉を焼く時等は、焼いた時間や、他の人の判断を参考にしながら、赤っ

ぽさがなくなったと判断している。今回の「時間がかかる」という話が結びついていると思った。

【視覚障害がある人への尊敬の意】

- ・いかに苦勞して、いかに練習（白杖や点字）して、少しでも自分ができることを増やそうとして、いかに懸命に生きているのかを知ることができ、改めて尊敬の意を感じた。（複数）
- ・触覚で、物の形を認識するのは難しいのに、視覚体験のない人がそれを認識できるのはすごい。
- ・白杖で電車の乗り込みがスムーズなのはすごい。

【今後、共生に向けて】

- ・「見えないって怖いな」と感じた。だからこそ、見える人に教えてもらう、助けてもらうことがいかに本人にとって楽であり、ありがたいことかを知った。
- ・色覚は時間をかけても無理な場合があるので、その点を科学的にどうにか解決できないかと思っている。
- ・「視覚」の話と、今までの「身体」や「聴覚」の障害の話を総合的にふまえ、今後ユニバーサルデザインについて考えていきたい。
- ・視覚障害や弱視の人の視点で、「ここは危険だな」等と思いながら歩き、できるなら改革していきたい。
- ・何をするのにも時間がかかるし、危険であるので、視覚障害や弱視の人を積極的に助けに行きたい。
- ・段差はなくした方がよい等考えられる人をどんどん増やしていくことがとても重要だと思うので、機会があったら友達に伝えていきたい。
- ・視覚障害者の住みやすい環境（人も施設も）はまだまだできていない。少しでも視覚障害者を助けたい。



【質問】

- ・弱視や全盲の方は歩くのに強い恐怖はないのか？
- ・常に疲労感が抱えているのか（慣れ問題か？）
- ・弱視の方はテレビを楽しんでいるのか。
- ・食事で熱いものとか、何か工夫はあるのか知りたい。

- ・数学などのとき「図による理解」等は必須だが、視覚障害だといづらいので、学習の進行レベルなどは遅くなるのだろうか。
- ・耳等の機能は向上しているのか？感覚の中で大きな部分を占めている視覚を一部または全部失う中で、他の感覚で補っているとは思うがどうか。
- ・点字は慣れることで、どのくらいまで認識しやすくなるのか？
- ・支援学校で働くきっかけやそのために必要だったことや資格等を知りたい。
- ・視覚障害者のための学校には、何か特別な仕組み等があるのか。
- ・現状の社会の制度や周囲の人の意識で、これからこう変わってほしい、変わるべきだということがあったら知りたい。

3.4.6 第6回 学校訪問・交流会

大塚特別支援学校 小学部 安達敬子先生

「小学部児童との交流」

12/17は大塚特別支援学校へ訪問し、小学部の児童24名と交流を行った。今回参加したのは、ゼミ生22名と高校科学部5名であった。

まず、企画検討の段階では小学部の安達主任とともに、小学部の児童が楽しめて、かつゼミ生が障害を学ぶに適した内容を検討した。案として科学実験を児童とゼミ生がペアになって楽しむという企画が挙げだったので、本校化学科の吉田に相談し、化学部高校2年生が協力することになった。当日のプログラムは小学部教諭の内倉広大先生と化学部と共同で吟味し企画・実現した。

当日の流れは以下のとおりである。

- ・事前レクチャー；安達先生から障害の説明と生徒の特長、交流会での注意事項などの話があった。
- ・交流会
自己紹介・あいさつ
アイスブレイク；
歌とダンスでペアづくり
科学実験；
「スライムづくり」
「空気砲」
「くるくるバルーン」
の実験をペアで楽しむ
- ・お土産交換；



小学部からは手作り石鹸
駒場からはホバークラフト

交流中のゼミ生は最初どようにかかわればよいか不安気であったが、アイスブレイクの歌やダンスでペアになり、化学部ブースで一緒に実験をする頃には児童・ゼミ生ともに一緒に楽しんでた。いつしか「こどもの目線に立ち、興味関心事に気づき、主体性を尊重しながら」ふれ合っていたのが印象的であった。



今回の五感（嗅覚を除く）をフル回転した異学年交流は両校の児童・生徒たちの表情を優しく、そしてイキイキとさせる企画となり、ゼミ生全員が童心に帰って楽しかったと振り返っていた。異学年しかも科学実験というイベント性がある企画と一緒に楽しむ交流は自然体で障害理解が深めるツールとなることが児童やゼミ生の様子から伺われた。

また、大塚の先生方の教育活動を見て、一人一人の子どもの能力や個性を把握し、ニーズに合った対応することによって、こどもの可能性を最大限に生かすかわり方になることを間近で学ぶことができた。

今回の交流を通して、交流しないと分からないことが多いことに気づき、まだまだ世の中の偏見・差別・先入観がある事実と知ったうえで、共生は「自分とは関係ない」とは思わないこと、相手のペースに合わせること、そして、このような交流の機会を通して、相互理解を深め、それぞれの個性や良さを生かしていける社会の実現を望むとの意見が多く見られた。

以下、生徒の感想を一部抜粋した。

【小学部児童の印象】

- ・明るい、元気、人懐っこい、素直、前向き
- ・ひとつのことに熱中する、積極的
- ・注意散漫になったりする

【交流を通しての気づき】

- ・ 童心に帰って遊べて楽しかった。(全員)
- ・ 力加減が難しいと思った。そういうことを知らずに接すると、驚くので、理解が必要だと感じた。
- ・ 先入観や偏見を持たないように心掛けていたつもりだが、このような交流を通していかないと、わからないことも多い。
- ・ 今回の交流のような経験を何度も行えば「共生」のために必要な意識・考えが自ずと身に付くと思う。
- ・ 無口で最初は困惑したが、好きなこと(色)に気づけたので、接しやすかった。相手に話す話題があるのとなんか違うと思った。
- ・ 大塚特別支援学校全体にあふれる温かい雰囲気の良さを感じた。このような環境で育てられれば、社会でも大きな問題を抱えずに生活していけると思った。
- ・ 簡単な言葉で繰り返し言うとか、身振りで教えてあげないといけないということを学んだ。
- ・ スポーツやダンスで交流を深めたら心は通じやすい。
- ・ 理屈抜きでワイワイやる方が一番良いのかと思った。
- ・ 「相手のペースに合わせること」が最も大切と感じた。

【共生について】

- ・ 世の中で偏見・先入観があると思うが、それを超えて共生していくことは大切だと思った。(複数)
- ・ 障害者と健常者の間で橋渡しをする存在が必要。
- ・ 障害がある人も健常者と同じように楽しむ心を持っていて、一緒に楽しめるという理解が広まっていければよいと思う。



【先生方の教育活動について】

- ・ 一人一人をよく観察し、ベストな対応を考えている。
- ・ 必ず視線を合わせて、叱るときは叱る、一緒に楽しむときは楽しむ、とメリハリをつけている。一緒に全力で楽しみ、全力で笑っている。
- ・ 寄り添いすぎず、離れすぎずに指導している。

- ・ 非常によく観察している。
- ・ はきはきしゃべっているのだからわかりやすい。
- ・ ある程度選択肢を与えたうえで、一人一人にサポートしている。



3.4.7 今後のゼミ

2014年度のゼミはあと2回で終了となる。1/10の第7回 視覚特別支援学校 間々田和彦先生による「特別支援のノウハウを生かした理科実験」として①「天体教材の実習の後、教材の解説、兼特別支援教育での教材の説明」②「雨粒教材及び教材の解説」③「積み木教材で、立体の量の増え方、視覚特別支援学校小学部での算数教材の提示」そして、1/24の第8回(最終回)では大塚特別支援学校 安部博志先生による「発達障害について」が行われる予定である。

4 考察

「障害」は特別なものとして日常生活から避けている健常者がいる。筑波大学特別支援教育センターからお借りしたDVDを視聴して、ご家族・親戚に障害がある方の中には、周囲の無理解によりネガティブな思考になり、カミングアウト出来ずにいることを知った。ご家族の一員に障害がある場合、ポジティブに受け入れるには周囲の理解やインフラの整備なども含めて考えるとまだ難しいと言わざるを得ない現状がある。しかしながら、どの生徒にも同様な状況が想定され、障害を持つ家族がいることをカミングアウト出来ず、介助をするために自己犠牲を課してしまうなど、ネガティブな思考になり自己肯定感を高めることが出来なくなるのは避けた。このような状況を改善するための1つの策としてゼミを開講した。

2011年度は初の試みで5名、2期目の2014年度では22名を対象に開講したが、どちらのゼミにおいて

も、普段の学校生活では出会うことのない「障害」を学び、障害に対するものの見方や考え方に触れ、「障害とは何か」「共生社会とは」を考える貴重な体験となっていた。

ゼミ生のほとんどは、同じ筑波大学の附属学校に在籍していながら、特別支援学校の存在を知らず、障害について深く考える機会のなかった生徒ばかりであった。それが、各回の講義や疑似体験、本人や家族からの話、児童・生徒との交流を重ね、障害について「何も知らない自分」もしくは「誤った障害理解をしていた自分」に気づき、障害や障害がある人、障害者のおかれている状況について興味関心が深まっていった。

ゼミ講義・模擬体験では、障害のある人が感じる困難や不安感・焦燥感・孤立感・疎外感等の心理的負担や車椅子更新等の経済的な負担、進学や就職・資格取得・結婚・医療等における不利益や道路・建築の環境整備等の社会的問題を学んだ。その中で、“障害が障害である”そのままの理由で当たり前のことが難しくなってしまう現状に違和感を覚え、健常者だけの快適な暮らしではなく、「障害者」「健常者」という区別のない、バリアフリーという言葉がなくなる社会が望ましいと考えるようになった。中には、手話を身につけたい、自分でできる身近な改善をしていきたいと積極的な姿勢をみせるゼミ生もいた。

2014年度ゼミでは、附属聴覚特別支援学校の高等部生徒や知的障害の附属大塚特別支援学校の小学部児童との交流そして肢体不自由のあるA君やろう者の柳氏の話聞く機会が実現できた。これらを通してゼミ生全員が今まで抱いていた障害の印象を一変させた。例えば、どの障害種別においても「障害と一概に言ってもさまざまな形態やレベルがある」「障害によりできないことはあるが、時間をかければある程度のことができる」「ちょっとした工夫や配慮で生活しやすくなる」「自分でやれることはしたいと思っているが、人によるサポートが必要であること」「介助は本人の気持ちに寄り添うことが一番である」「相手（のペース）に合わせる」等の共通点を知った。

さらに、障害がある人自身は「自分のことを障害に思ったことがない」「障害を本当に気にしていない」「障害があっても夢を持っている」「障害があっても楽しみや好みがある」「一人の人間として自分らしさを求めて生きている」「積極的に朗らかに生きている」等に驚き、健常者と何ら変わらない、自分たちと何ら変わらないということを知ることができた。

交流会では、一方的に学ぶのではなく、お互いが楽

しみながら、「障害のある人は障害を教える、ゼミ生は障害を教えてもらう」関係があったので、より障害理解や認知を深められた。大塚特別支援学校の小学部との交流では、異学年しかも科学実験というイベント性の高い企画と一緒に楽しむ交流であったので、ともに笑顔が溢れる中で障害を学ぶことができた。また、聴覚特別支援学校の高等部の交流においては、アイスブレイクやクイズ、手話を学び手話による自己紹介、同じお題と一緒に考える等のグループワークを通して、生徒同士がともに遊び、ともに考える企画だったので、自然と「僕らと同じ高校生、僕らと同じに楽しむことができる」という実感が得られた。

後日談であるが、本ゼミを通じて知り合った聴覚特別支援学校の高等部生徒の数人とゼミ生は、交流会後もSNSでつながっている。ゼミ生はSNSでのやりとりには全く障害を感じず、普通の高校生だと語っていた。交流一か月後の本校文化祭には、高等部生徒が自主的に本校へ来校し、ゼミ生とともに校内を散策している姿も見かけている。これらは、想定外のうれしい展開であった。

ゼミ生はこれらの交流をとおして、日頃から先入観や偏見を持たないように心掛けていても交流をしなければ気付かなかったことが多かったと振り返り、今後、共生社会を築くには、障害のある人と積極的なコミュニケーションが必要であり、今回のような交流の機会を多くし、距離感や相互理解を深めるべきとの意見を多くあげている。従って、附属間交流は障害の壁を低くし、共生社会を築く第一歩になるといえよう。

今回初の試みであった本校卒業生のご家族が一人一人の立場からそれぞれの視点で障害を語ってくれたこと、そして社会で起業しろう者の望む社会のロールモデルを実践している聴覚特別支援学校（当時、附属聾学校）卒業生 柳氏の言葉は、障害科学を理解する上で意義深いものであり、ゼミ生の心に深く刻み込まれていた。このような機会は今後も設けていきたい。

さて、本校においてのゼミのニーズであるが、中学3年・新高校1年のゼミナールオープンで10名前後の生徒がゼミ見学・参加者があった。また、最近、保健室にある点字キットで手紙を書いたり、聴覚障害や障害について書かれている漫画や書籍などを読む生徒が増えてきている。これらの様子から在校生においても障害を学ぶニーズもあることがわかってきた。また、本校58期卒業生の辻賢太郎氏は東京大学医学部学生主催「鉄門手話の会」を立ち上げており、柳氏の店の常連客であった。また会として柳氏を講師として招き

『ほとんどのろう者は医師の「残念です」発言によって、社会的に「障害」を被り、障害者になっていく』³⁾
⁴⁾等の現状や「ろう者の望む社会」の話を聞いていた。また、本校卒業生19期卒業生である児玉龍彦氏は1999年の東京大学先端科学技術研究センターの設立に当たり、附属視覚特別支援学校卒業生の福島智氏（全盲ろう）を教授として招いている。児玉氏は「21世紀は人間内部に向かわなければならない。当然、障害を持っている人も、人間の一形態なので、障害のある人を除外した人間の科学は不自然です。」⁵⁾と語っている。これらより、ゼミを始める以前から、本校生徒には障害を受け入れる資質があることが明らかとなってきた。

現在、日本では共生社会の実現に向けて、インクルーシブ教育への関心が徐々に高まりつつあり、障害のある生徒と障害のない生徒がともに学び合う生活を通じて、相互理解を深めていくことで共生社会を実現するための基本的価値観が生まれる⁶⁾と言われている。

しかしながら、2012年の調査によると、日本の実際の現状は、「共生社会」という考え方の認知状況においては「知っている」40.9%、「言葉だけは聞いたことがある」24.2%、「知らない」35.0%であった。また、障害を理由とする差別や偏見の状況においては「あると思う」89.2%に達し、2007年の前回の調査から6.3ポイントも上昇、障害を背景とする差別が根強く残っていることが分かる⁷⁾。この結果をみても、社会に出る前の高校において障害を学び、障害の有無にかかわらず、ともに学び楽しむ機会を多く設けることの意義が大きい。従って2014年度プログラムの実践は、今後の共生社会の実現に向けて、基礎的価値観を育む一助となる構成となっており、ゼミの有効性はあるといえよう。

今後の課題は、「すべての人にとって満足できる合理的配慮とは何か？」を考える機会をつくることである。ゼミの中での問いにもあったように、究極のバリアフリーはなく、ある人にとって必要なものが、他の人にとって邪魔なものであったりする。すべての人が満足できるような設計を考えるのは、本当に難しい。その解決には障害者も健聴者も同じ立場で話す機会を設けることであると考え。そのためにも、障害種別すべての児童・生徒との交流の機会を設け、障害の有無にかかわらず、問題を共有することが必要である。今後は全附属学校交流会を実現させ、「ともにいきる」社会を考えることを目指していく。

2011年と2014年のゼミを通して確認できたことは、多感な成長期にある中高生は「障害」を障害として意

識しない傾向が強いということである。むしろ、普通の同世代の友人として素直に受け入れている。健常者である本校生徒は、「障害」に対して無知であった自分を恥じている感さえある。基本的に「障害者」と「健常者」を区別しているのは、教育界の非継続的な体験プログラムであり、小・中・高を通した共生についてのプログラムを体験させることで、児童・生徒は正しく（身体的な）障害を認識すると考えられる。新しい社会の形成者である児童・生徒達が、お互いを支え合いながら生きていくよりよい社会を実現するためには、すべての特別支援学校を有する筑波大学がリーダーシップをとり、啓蒙活動をしていくべきであると考え。本校の学校目標は「自由・闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」であり、卒業後は社会に貢献するべく様々な活動をする者がいる。政治・経済・法曹界・建築工学・人間工学・保健・医療・教育など多分野から、現在の共生しにくい環境を変えていける人材を育成するための本ゼミは、筑波大学の啓蒙活動の一助となるべく今後も継続・発展させていく。

【謝辞】

このゼミの実現に際しては附属特別支援学校の先生方、児童・生徒、柳氏、ご協力いただいた皆様、そして本校校長のご理解・ご協力をいただいたおかげです。心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞にかせて頂きます。

【参考文献】

- 1.障害者施策 内閣府
- 2.柘植雅義著（2013）『特別支援教育』中公新書
- 3.柳匡裕著（2012）「Sign with Me：店内は手話が公用語」ヒューマンケアブック
- 4.柳匡裕（2014）「マイルストーン」<http://artn.jp> 手話 de ソーシャルエンターテインメントスペースありがとうの種
- 5.生井久美子著（2009）ゆびさきの宇宙～福島智・盲ろうを生きて～ 岩波書店 p175
- 6.中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会論点整理抜粋（2010）文部科学省
- 7.障害者白書「障害者に関する世論調査」（2012）内閣府